

1. はじめに 地震、風荷重等の不規則な外力を受ける構造物の応答解析においては、構造物は解析可能な力学モデルに単純化されると同時に、外力も確率過程によりモデル化される。一般に、構造物に作用する外力のモデル化に伴う不確定性は大きい。しかし、構造物においても、モデル化に伴うばらつき、材料強度等の不確定要因は、力学モデルの中に持ち込まれる。また、走行車両による橋梁の応答解析では、特定の車両による応答ではなく、車両の変動、例えば、車両重量、固有振動数、減衰定数等の変動を考慮した、応答の平均的な挙動を表現する解析が望まれる。本研究では、このような構造物の解析モデルを構成すると共に、具体的な解析手法として二つの解法（振動法、階層法）を提案した。不規則外力を受ける構造物系の応答において、系のパラメーターが確率変数となると、外力に対する応答の二乗平均値は確率変数となる。ここでは、この二乗平均値の系のパラメーターに対する平均値について検討したものである。

2. 力学モデルの表現 非定常不規則外力を受ける構造物系の運動方程式は、状態空間でベクトル表示すると、(1)式で記述される。非定常外力を、(2)式のように、確率関数と確率過程の積で表わされるものと考え、確率過程は、(3)式のフィルター方程式の出力として与えられるものとする。この時、構造物-フィルター系は、(4)式の伊藤型の確率微分方程式で表現できる。一般性を失うことなく、(4)式の解過程の平均値応答は0であるものとする。このとき、外力 $W(t)$ に対する解過程 $X(t)$ の共分散行列 $R_X(t)$ を

$$R_X(t) = E[X(t)X(t)^T] \quad \text{と定義すると、この時}$$

間の変化は、(4)式の共分散方程式に支配される。ここに $E[\cdot]$ は確率過程に対する平均の演算子である。

次に、確率微分方程式の係数が確率変数である場合、その確率変数の集合を Λ で表し、 $\Lambda = \{\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n\}$ で定義する。 $\lambda_1, \dots, \lambda_n$ の実現値の集合を $\lambda = \{\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_n\}$ により定義する。さらに、 Λ の確率密度関数を $P(\Lambda)$ で定義する。 Λ に関する平均の演算子を $\langle \cdot \rangle$ の記号で表す。本研究で求める量は、応答の分散・共分散の確率変数 Λ に対する平均値であるから、これは、次式で与えられる。

$$\langle R_X(t, \Lambda) \rangle = \int R_X(t, \lambda) P(\lambda) d\lambda \quad \text{----- (6)}$$

式と対応する共分散方程式を次式で記述する。

$$X(t, \Lambda) = A(t, \Lambda) X(t) + B(t, \Lambda) W(t) \quad \text{----- (7)}$$

$$\dot{R}_X(t, \Lambda) = A(t, \Lambda) R_X(t, \Lambda) + R_X(t, \Lambda) A(t, \Lambda)^T + B(t, \Lambda) Q B(t, \Lambda)^T \quad \text{----- (8)} \quad \text{ここで、共分散}$$

$R_X(t, \Lambda)$ も確率変数となり、この式も確率微分方程式になる。

3. 振動法による定式化

確率変数 Λ は、一般に、平均値 $\langle \Lambda \rangle$ と平均値回りの変動 Ξ に分離することができる。

$$\Lambda = \langle \Lambda \rangle + \Xi$$

$B(t, \Lambda)$, $X(t, \Lambda)$ は以下のように展開できる。変動 $\Xi(t)$ が微小である場合、 Ξ の2次の項まで考慮すると、応答の共分散は次式で与えられる。

ただし $\Xi = \{\xi_1, \dots, \xi_n\}^T$ である。このとき、 $A(t, \Lambda)$,

$$A(t, \Lambda) = A_0(t) + \sum_{i=1}^n \xi_i A_i(t) + \sum_{i,j=1}^n \xi_i \xi_j A_{ij}(t) + \dots \quad (10)$$

$$B(t, \Lambda) = B_0(t) + \sum_{i=1}^n \xi_i B_i(t) + \sum_{i,j=1}^n \xi_i \xi_j B_{ij}(t) + \dots \quad (11)$$

$$X(t, \Lambda) = X_0(t) + \sum_{i=1}^n \xi_i X_i(t) + \sum_{i,j=1}^n \xi_i \xi_j X_{ij}(t) + \dots \quad (12)$$

$$\langle R_X(t, \Lambda) \rangle = R_{X_0}(t) + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \sigma_{ij}^2 R_{X_i X_j}(t) + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \sigma_{ij}^2 (R_{X_0 X_i}(t) + R_{X_0 X_j}(t)^T) \quad (13)$$

ここに、 $\sigma_{ij}^2 = \langle \epsilon_i \epsilon_j \rangle$ であり、 $R_{X_0}(t)$ 、 $R_{X_i X_j}(t)$ 、 $R_{X_0 X_i}(t)$ は $E[X_0(t)X_0(t)^T]$ 、 $E[X_i(t)X_j(t)^T]$ 、 $E[X_i(t)X_0(t)^T]$ である。
従って $\langle R_X(t, \Lambda) \rangle$ の解析は、 $R_{X_0}(t)$ 、 $R_{X_i X_j}(t)$ 、 $R_{X_0 X_i}(t)$ の解析に帰着する。(10)、(11)、(12)式を(13)式に代入し、改めて確率微分方程式を構成する。加に対応する共分散方程式を誘導すると、連成した次の共分散方程式が得られる。
非定常応答解析では、これらの連成した微分方程式を解くことにより、分散・共分散応答が得られる。

4. 階層法による定式化

階層法では、(8)式の共分散方程式を基礎式とする。これはマトリックス方程式であるから、適当な変換を行うことによ

$$\left. \begin{aligned} \dot{R}_{X_0}(t) &= A_0(t) R_{X_0}(t) + R_{X_0}(t) A_0(t)^T + B_0(t) S B_0(t)^T \\ \dot{R}_{X_i X_j}(t) &= A_0(t) R_{X_i X_j}(t) + R_{X_i X_j}(t) A_0(t)^T + A_i(t) R_{X_0 X_j}(t) + B_0(t) S B_i(t)^T \\ &\quad + B_i(t) S B_j(t)^T \quad (i, j = 1, 2, \dots, n) \\ \dot{R}_{X_i X_0}(t) &= A_0(t) R_{X_i X_0}(t) + R_{X_i X_0}(t) A_0(t)^T + A_i(t) R_{X_0 X_0}(t) \\ &\quad + A_i(t) R_{X_j X_0}(t) + A_j(t) R_{X_i X_0} + B_j(t) S B_0(t)^T \quad (i, j = 1, 2, \dots, n, i \neq j) \end{aligned} \right\} (14)$$

り、 $n(n+1)/2$ のベクトルを変数とする方程式に変形することが可能である。 $G(t, \Lambda)$ および $F(t, \Lambda)$ は、確率変数 $\dot{H}(t, \Lambda) = G(t, \Lambda) H(t, \Lambda) + F(t, \Lambda)$ を陽に表した(16)、(17)式で表わすことができる。

$$G(t, \Lambda) = G_0(t) + \sum_{i=1}^n \lambda_i G_i(t) + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \lambda_i \lambda_j G_{ij}(t) \quad (16)$$

$$F(t, \Lambda) = F_0(t) + \sum_{i=1}^n \lambda_i F_i(t) + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \lambda_i \lambda_j F_{ij}(t) \quad (17)$$

(16)、(17)式を(15)式に代入し、両辺に Λ による平均操作を行うと次式を得る。

$$\langle \dot{H}(t, \Lambda) \rangle = G_0(t) \langle H(t, \Lambda) \rangle + \sum_{i=1}^n G_i(t) \langle \lambda_i H(t, \Lambda) \rangle + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n G_{ij}(t) \langle \lambda_i \lambda_j H(t, \Lambda) \rangle + F_0(t) + \sum_{i=1}^n \langle \lambda_i \rangle F_i(t) + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \langle \lambda_i \lambda_j \rangle F_{ij}(t) \quad (18)$$

この式の中には、新しい未知数 $\langle \lambda_i H(t, \Lambda) \rangle$ 、 $\langle \lambda_i \lambda_j H(t, \Lambda) \rangle$ が現れる。両辺に λ_R を掛けて平均をとる。

$$\begin{aligned} \langle \lambda_R \dot{H}(t, \Lambda) \rangle &= G_0(t) \langle \lambda_R H(t, \Lambda) \rangle + \sum_{i=1}^n G_i(t) \langle \lambda_R \lambda_i H(t, \Lambda) \rangle + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \langle \lambda_i \lambda_j \lambda_R H(t, \Lambda) \rangle + G_{ij}(t) \\ &\quad + F_0(t) \langle \lambda_R \rangle + \sum_{i=1}^n \langle \lambda_i \lambda_j \rangle F_i(t) + \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n \langle \lambda_i \lambda_j \lambda_R \rangle F_{ij}(t) \quad (R = 1, 2, \dots, n) \end{aligned} \quad (19)$$

この式では、さらに $\langle \lambda_i \lambda_j \lambda_R H(t, \Lambda) \rangle$ が現れ、この連鎖が無限に続く。この種の方程式の近似解法はいくつか提案されているが、本研究では、高次のキュムラントを打ち切る仮定を設ける。

5. 数値計算を考察

数値計算の対象は、相関を有する確率過程を外力とする1自由度系である。ここでは1自由度系の質量とばね定数が変動係数0~0.3で変動する場合について考えた。確率過程の外力のパワースペクトルは、

$$S_z(\omega) = S_0 / \{ (\omega_0 - \omega)^2 + 4\zeta^2 \omega_0^2 \} \quad (20) \quad \text{である。}$$

計算結果の1例を図-1と図-2に示した。この計算例

$$\begin{aligned} \mu_i &= \langle \lambda_i \rangle \quad \sigma_{ij}^2 = \langle (\lambda_i - \mu_i)(\lambda_j - \mu_j) \rangle \\ K_{ijR} &= \langle (\lambda_i - \mu_i)(\lambda_j - \mu_j)(\lambda_R - \mu_R) \rangle \\ \langle \lambda_i \lambda_j H(t, \Lambda) \rangle &= (\sigma_{ij}^2 - \mu_i \mu_j) \langle H(t, \Lambda) \rangle + \mu_j \langle \lambda_i H(t, \Lambda) \rangle \\ &\quad + \mu_i \langle \lambda_j H(t, \Lambda) \rangle \\ \langle \lambda_i \lambda_j \lambda_R H(t, \Lambda) \rangle &= (K_{ijR} - 2\mu_i \mu_j \mu_R) \langle H(t, \Lambda) \rangle \\ &\quad + (\sigma_{ij}^2 + \mu_i \mu_j) \langle \lambda_R H(t, \Lambda) \rangle + (\sigma_{iR}^2 + \mu_i \mu_R) \langle \lambda_j H(t, \Lambda) \rangle \\ &\quad + (\sigma_{jR}^2 + \mu_j \mu_R) \langle \lambda_i H(t, \Lambda) \rangle \end{aligned}$$

は、1自由度系の減衰定数および(20)式の ζ をそれぞれ0.02とした場合である。外力は帯域過程となり、中心周波数 ω_0 が1自由度系の固有振動数 ω_1 と一致すると共振する。しかし、1自由度系のパラメータの変動が大きくなると、1自由度系の応答は減少することが予想される。図-1は、この状態を示したものである。図-2は、1自由度系の固有振動数の平均値 $\bar{\omega}$ が $0.8\omega_0$ の場合である。変動係数が大きくなると、応答は増大する。なお、非定常応答解析は、議論当日発表する予定である。

図-1 定常 R.M.S. 応答 ($f_i = f_0$)

図-2 定常 R.M.S. 応答 ($f_0 = 0.8 f_i$)